

平成 29 年度 第 3 回北関東救急看護研究会

発表概要

テーマ： PICS 予防のための取り組みに関する現状と課題

話題提供者

所属： 自治医科大学附属病院

氏名： 阿久津 美代

近年集中治療医学の目覚ましい進歩によって、重症患者の救命率は格段に上がっている。米国では、重症敗血症患者の 3 年生存率が 9 年間で 119%増加したことや、その他の重症疾患の死亡率も、大幅に減っていることが調査で明らかにされている。

しかし、救命率や生存率が上昇した一方で、集中治療を受けた患者が、退室 6 ヶ月後に 50%の割合で、ADL に障害をもっているという調査報告もある。また、集中治療室退室 6 ヶ月後も、約 6 割の患者が、何らかの痛みをもって生活しており、身体機能の回復が図れていないまま、日常生活を送ることを余儀なくされているともいわれている。さらに、集中治療を受けた患者は、身体機能だけではなく、認知機能やメンタルヘルスにおいても、何らかの障害が出現、あるいは残存することが明らかになっている。

このような状況から、2010 年の米国集中治療医学会で PICS（集中治療後症候群）という概念が提唱され、現在 PICS 予防の必要性が求められ、日本でも徐々にその動きがみられるようになってきている。患者アウトカムは短期的な評価から長期的な評価に変化しており、患者の精神面での豊かさや QOL(Quality Of Life)が重要視されるようになってきている。

現在では、PICS になりやすい要因が明らかにされており、そのエビデンスも積み上げられている。また PICS は生存患者に生じるものであるが、家族もまた PICS-F という障害に、ともに苦しむことが分かっており、患者と家族を含めたケアの確立は急務であり、そのための取り組みが急がれる。しかし、新たな取り組みのためには、人的リソースの問題や他職種連携や協働など、様々な部分で障壁となることがあるのも否めない。解決のために時間を要することではあるが、まずは医療従事者間での PICS、PICS-F に関する共通理解と、合意形成が必要である。集中治療という生命の危機を乗り越えた患者と家族が、本当の意味で回復できるように、今後取り組むべき課題は多い。

(838 文字)